

<実践報告>

学校における世代間交流に求められる教師の力量
—学習指導要領の分析と高齢者へのインタビュー調査を通して—

白井克典 長野市立柳町中学校
土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

Teachers' Ability to Facilitate Intergenerational Exchanges in Schools
—Through Analysis of the Curriculum Guidelines and Interviews with Elderly People—

SHIRAI Katsunori: Yanagimachi Junior High School, Nagano City

DOI Susumu: Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

| | |
|---------------|--|
| 研究の目的 | 児童生徒と高齢者の世代間交流の重要性が高まってきている。このことを学習指導要領の分析によって明らかにすると共に、その裏付けとなる調査を実施する。 |
| キーワード | 世代間交流 須坂町並みフェスタ 2004 信大茂菅ふるさと農場 学習指導要領 |
| 実践の内容 | 「信大茂菅ふるさと農場」において、高齢の農家先生と共に農作業のカリキュラム開発を実施した(2000年度～2004年度)。2004年5月23日に行われた「信州須坂町並みフェスタ 2004」に、筆者は「信大 YOU 遊世間(ワールド)」の一員として参加した。そしてこのフェスタにボランティアとして参加している12名の高齢者に一人ずつ直接にインタビューをさせていただいた。 |
| 実践者名 | 第一著者と同じ |
| 対象者 | 信大茂菅ふるさと農場」に参加している約30名の子ども 学生スタッフ15名、高齢の農家先生2名 「信州須坂町並みフェスタ 2004」に参加した子ども、学生スタッフ8名、ボランティアとして参加した12名の高齢者 |
| 実践期間 | 2000年度～2004年度 2004年5月23日 |
| 実践研究の方法と経過 | 「須坂町並みフェスタ 2004」に参加した高齢者12名に直接合っ てインタビュー調査を行い、高齢者が児童生徒との世代間交流に 対してどのような思いを抱いているかを明らかにする。 また、「信大茂菅ふるさと農場」においては近い将来に教師と なる教育学部学生が、農作業の実践の中で地域の農家先生と親し く交流することによって、高齢者への尊敬と親しみの思いを強く していくことが明らかになった。 |
| 実践から得られた知見・提言 | 学校教育において子どもと高齢者の世代間交流を実現するた めには、教師が地域の高齢者と協働してカリキュラム開発を行う ことが重要である。 |

1. 本稿の目的

本稿の目的は、学校教育における児童・生徒と高齢者の世代間交流の重要性の観点から、「信大茂菅ふるさと農場」における学生と農家先生との交流、並びに「信大 YOU 遊世間(ワールド)」の一環として参加した「信州須坂町並みフェスタ 2004」において出会った 12 名の高齢者に直接インタビューした資料に基づいて、児童生徒と高齢者の世代間交流を実践していく上で教師に求められる力量について考察することを目的としている。

2. 高齢社会と世代間交流の重要性

日本の高齢者人口の急激な増加は世界に類をみない速さで進んでおり、日本社会の大きな特徴の一つとされている。高齢化が進む一方、現在、地域社会や家庭において世代間の分離や断絶、特に子どもと高齢者の交流の減少が指摘されている。このような社会状況の中、平成 9 年 6 月、中央教育審議会は「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第二次答申)」を公表した。答申では、21 世紀の社会を展望すると高齢社会という問題は避けては通ることができない重要な課題であるとし、高齢社会を生きていく子どもたちをどのように育てていくのかという問題は極めて重要な課題であると高齢社会に対応する教育の在り方が提言された⁽¹⁾。地域社会の変容や核家族の増加等の理由により、地域社会や家庭で子どもと高齢者の交流が減少していることを踏まえると、今後、ますます学校教育においては児童・生徒と高齢者との交流活動が増加していくと考えられる。

子どもと高齢者の交流活動に関する研究動向を概観すると、その多くは社会学的、心理学的な見地からなされており、教育学からのアプローチは少ない。また、社会教育における子どもと高齢者の交流活動に関する研究はある程度蓄積されているものの、学校教育における研究は極めて少ないのが現状である。角尾(2002)は、学校教育における児童・生徒と高齢者の交流(世代間交流)はカリキュラム展開の過程において強い影響力をもっている学校管理者やその他の人々が子どもと高齢者の交流(世代間交流)の意義や効果、重要性を理解するまでは教育制度の中で実質のない地位をもち続けるであろうと指摘している⁽²⁾。つまり、学校教育における児童・生徒と高齢者の交流活動には、カリキュラムを編成する教師がその意義や重要性を認識していることが重要なのである。

以上、高齢化率の増加、子どもと高齢者の交流の減少といった社会状況、学校教育における子どもと高齢者の交流に関する研究が極めて少ないこと、学校教育においては教師に世代間交流のカリキュラム開発の力量が求められていることについて述べた。

3. 学習指導要領に記述された「祖父母」「高齢者」「地域の人々」の数量的変遷

学校教育において児童・生徒と高齢者との世代間交流が必要とされていることを明らかにするために、学習指導要領に記述された「祖父母」「高齢者」「地域の人々」の記述の変遷を数量的視点と内容的視点から分析する。なお、本稿においては児童・生徒と高齢者の世代間交流について考察するものであるが、「地域の人々」のなかに高齢者も含まれると考

え、「地域の人々」の記述も調査対象とした。また、祖父母も同様に広い意味で高齢者に含まれると考え、「祖父母」の記述も調査対象とした。

小学校学習指導要領に記述された「祖父母」「高齢者」「地域の人々」の記述の変遷を数量的視点から分析した結果は次のとおりであった。「祖父母」、「高齢者」、「地域の人々」の記述は昭和 33 年度版では「祖父母」の記述が社会科で 1 箇所見られただけである。昭和 43 年度版では「地域の人々」の記述が社会科で 2 箇所、体育科で 1 箇所の計 3 箇所見られ、昭和 52 年度版では「地域の人々」の記述が社会科で 1 箇所見られただけである。しかし、平成元年度版からは「祖父母」、「高齢者」、「地域の人々」の記述は大幅に増加している。

「祖父母」の記述が道徳で 3 箇所、「高齢者」の記述が道徳で 2 箇所、「地域の人々」の記述が社会科で 11 箇所の計 16 箇所見られた。この学習指導要領から「高齢者」という記述が道徳において初めて使用されたことも特筆すべき点である。平成 10 年度版は「高齢者」、「地域の人々」の記述はさらに増加する。「祖父母」の記述が道徳で 3 箇所、「高齢者」の記述が総則、生活科、特別活動で各 1 箇所、道徳で 2 箇所あり、「地域の人々」の記述が総則で 2 箇所、社会科で 6 箇所、生活科で 6 箇所、道徳、特別活動で各 1 箇所ずつの計 24 箇所に記述されている。

次に中学校学習指導要領においては、「祖父母」、「高齢者」、「地域の人々」の記述は昭和 33 年度版では「老人(高齢者に含める)」の記述が技術・家庭科で 3 箇所見られる。昭和 44 年度版では「老人(高齢者に含める)」の記述が技術・家庭科で 9 箇所と大きく増加していることがわかる。しかし、内容を比較すると昭和 33 年度版、技術・家庭科の内容を昭和 44 年度版では細分化しているに過ぎず、実質的な数的増加とは考えられない。昭和 52 年度版では「地域の人々」の記述が社会科で 2 箇所見られただけである。平成元年度版になると道徳において「祖父母」、「高齢者」の記述が各 1 箇所ずつ、「地域の人々」の記述は社会科で 2 箇所の計 4 箇所に見られる。平成 10 年度版では「高齢者」と「地域の人々」の記述は大幅に増加する。祖父母の記述が道徳で 1 箇所、高齢者の記述が総則、技術・家庭科、道徳、特別活動で各 1 箇所、地域の人々の記述が総則で 2 箇所、技術・家庭科で 4 箇所、道徳、特別活動で各 1 箇所ずつの計 12 箇所に記述されている。

以上の結果、小学校、中学校ともに学習指導要領に記述された「祖父母」「高齢者」「地域の人々」の数は年々増加していることが明らかになった。また、平成 10 年度版の学習指導要領にはそれ以前の学習指導要領に比べ多くの教科や領域で「祖父母」「高齢者」「地域の人々」の記述が見られることが明らかになった。

4. 学習指導要領に記述された「祖父母」「高齢者」「地域の人々」の内容的変遷

学習指導要領の記述を内容面から考察するために、直接的な記述であるかそれとも間接的な記述であるかに分けて比較した。直接的記述とは「祖父母」「高齢者」「地域の人々」が学習の中心として取り上げられているということであり、間接的記述とは「祖父母」「高齢者」「地域の人々」が中心の学習内容に付随して取り上げられているということである。

そして直接・間接を X 軸で表した。一方、記述内容が情操の育成に重点を置いたものであるか、それとも知識・理解に重点を置いたものであるかに分けて、これを Y 軸として表した。

4.1 昭和 33 年度版～平成 10 年度版の小学校学習指導要領の内容的分析

小学校学習指導要領での記述内容は間接的記述で知識・理解に重点を置いた内容から直接的記述で知識・理解に重点を置いた内容へと移り変わっている。平成元年度版になると記述内容は直接的記述で知識・理解に重点を置いた内容に加え、直接的記述で情操の育成に重点を置いた内容が加わるようになった。

昭和 33 年度版と昭和 43 年度版の社会科では「父母や祖父母の子どものころに比べて変わった点が少なくないが…⁽³⁾」や「地域の人々の生活にみられる歴史的な移り変わりに目を開かせ…⁽⁴⁾」など社会の歴史的変容を捉えさせる一つの視点として祖父母や地域の人々が示されている。この記述に代表されるように昭和 33 年度版、昭和 43 年度版における記述内容の多くは祖父母や高齢者、地域の人々を題材の中心として取り上げたものではなく、他の学習内容に付随して取り上げられている。しかし、平成元年度版、平成 10 年度版になると記述内容は社会科の「地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする⁽⁵⁾。」といったように祖父母や高齢者、地域の人々が学習の中心として取り上げられるようになっていく。また、平成元年度版以後においては道徳の記述、「身近にいる若い人や高齢者に温かい心で接し、親切にする。⁽⁶⁾」や「父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。⁽⁷⁾」に代表されるように高齢者や祖父母が学習の中心として扱われ、高齢者や祖父母に対する情操の育成に重点が置かれ記述内容が加わるようになる。

4.2 昭和 33 年度版～平成 10 年度版の中学校学習指導要領の内容的分析

中学校においては記述内容は直接的記述で知識・理解に重点を置いた内容から直接的記述で情操の育成に重点を置いた内容へ移り変わっている。

昭和 33 年度版、昭和 44 年度版、昭和 52 年度版の記述内容は昭和 33 年度版の家庭科「調理では、第 2 学年の調理の学習を発展させるとともに、老人・病人などの食物の調理、客ぜん調理および行事食の調理に関する基礎的技術を習得させ、食生活を改善する態度を養う。⁽⁸⁾」に代表されるように老人や地域の人々に関する知識を得たり、理解を深めることに重点を置いたものであった。しかし、平成元年度版になると記述内容は道徳の「父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くようにする。⁽⁹⁾」や「地域社会の一員としての自覚をもち、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に尽くすようにする。⁽¹⁰⁾」に象徴されるように祖父母や高齢者に対する情操の育成に重点が置かれている記述内容へと移り変わっている。

4.3 地域の高齢者との協力・連携・交流

小学校においても中学校においても平成 10 年度版になると、祖父母、高齢者、地域の人々

との協力や連携，交流の必要性を示した記述となり，世代間交流を一層重視することが求められている．いわば X 軸と Y 軸の交差した原点において「連携・協力・交流」を推進することが求められているのである．

平成 10 年度版小学校，中学校学習指導要領の総則では，指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として「開かれた学校づくりを進めるため，地域や学校の実態等に応じ，家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること．また，小学校間や幼稚園，中学校，盲学校，聾学校及び養護学校などとの間の連携や交流を図るとともに，障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること⁽¹⁾」が示されている．さらに小学校では生活科や道徳，特別活動において，また中学校では家庭科や道徳，特別活動において祖父母や高齢者，地域の人々と協力・連携し，実際に触れ合う交流の場を設けるように示されている．このことから，平成 10 年度版学習指導要領からは祖父母や高齢者，地域の人々と実際に交流するといった交流体験活動が学校教育において求められていることが分かる．また，「開かれた学校づくり」を進めるために教科や領域にとらわれず「祖父母」や「高齢者」，「地域の人々」と交流することが重要になっていると考えられる．

5. 「信州須坂町並みフェスタ」にボランティア参加した高齢者の願い

筆者は「信大 YOU 遊世間」の一環として 2004 年 5 月 23 日に行なわれた「信州須坂町並みフェスタ 2004」，2004 年 12 月 18 日に行なわれた「岡谷市イルフクリスマスパーティー」にボランティアとして参加した．「信州須坂町並みフェスタ 2004」にボランティアとして参加した高齢者の方々 12 名，及び「岡谷市イルフクリスマスパーティー」に参加した高齢者 1 名の計 13 名にインタビュー調査を行なった．インタビュー調査の質問項目は「活動に参加した理由は何ですか」「活動に参加してよかったことはなんですか」「子ども達に身につけて欲しいことはなんですか」（どのような子どもに育てて欲しいですか）の 3 項目である．インタビューの返答を分析すると以下のような高齢者の願いが明らかになった．

5.1 子ども達との直接的な交流を望む高齢者

「活動に参加した理由は何ですか」という質問については 62 歳女性「60 歳になってようやく自分のしたいことができるようになった．子ども達とたくさん触れ合いたい」，70 歳男性「子ども達と遊びたい．それだけだな．子どもに教えていると子ども達からいろいろなことを学べる」，70 代女性「仲間を作りたかった．子ども達や色々な人たちと交流したかった」，61 歳女性「子ども達とたくさん交流したい」，61 歳女性「総合的な学習などで私達をたくさん取り入れて欲しい．子ども達とたくさん交流したい」という返答があった．また，「活動に参加してよかったことはなんですか」という質問には 56 歳女性「かざらない子どもと触れ合うことができたことが一番の喜びです．一緒に時間を過ごせる，一緒に何かをできる，一緒に涙を流せる，一緒にできるというのが自分の喜びとなっています．子どもの成長を見ることができることも喜びです」，67 歳男性「子ども達との交流ができる．子どもから「これ教えて」とたくさん寄ってくる．駆け引きなくお付き合いができる」

という返答があった。このことから多くの高齢者が子ども達との直接的な交流を望んでおり、子ども達と交流すること自体に喜びを感じていることが伺える。

また、70歳男性「今の子ども達はかなづちやのこぎりなど道具の使い方を知らない。お父さんもお母さんもしらないので、教える人がいないのだろう。子ども達に道具の使い方を教えたいという思いもあった」、70歳男性「子ども達に道具の使い方を教えたい。俺達のころは縦のつながりがあって上のものから道具の使い方を教わった。親の世代は知らないで子ども達は親から学べない。親も見ているだけではなくて子ども達と一緒に道具の使い方を勉強して欲しい。年を取ってから子ども達に何かを教えたい、残したいという気持ちが生まれてきた」という返答や70歳男性「子ども達からの「ありがとう」という言葉だけでこういう活動をやっている」、70歳男性「小さい子どもが「ありがとう」と言ってくれるそれだけで嬉しい。喜んでくれる姿をみるだけで嬉しい」、86歳男性「ボランティア活動を通して初めて人の喜びを自分の喜びとして感じるようになった」という返答があった。子ども達との直接的な交流を通して高齢者は「子ども達に自分の技を伝えたい」、「子ども達の役に立ち、子ども達の喜ぶ姿を見たい」という願いを持っていることも明らかとなった。

5.2 高齢者の願う子ども達の姿

「子ども達に身につけて欲しいことはなんですか。(どのような子どもに育てて欲しいですか。)」という質問については、「あいさつができる子どもに育てて欲しい」「善悪の判断がつくような子どもに育てて欲しい」「人の痛みが分かり、人に感謝することができる子どもに育てて欲しい」というように高齢者が子ども達にさまざまな願いを持っていることが明らかとなった。

6. 「信大茂菅ふるさと農場」における学生と農家先生の協働によるカリキュラム開発

「信大茂菅ふるさと農場」は2007年度(平成19)現在で8年目を迎えている。この実践の特色は学生が農場長となり、地域の農家先生(77歳)と協働でカリキュラム開発に取り組んでいるところにある。学生と地域の農家先生が協働してカリキュラム開発を行ってきたところに8年間も続いてきた一番大きな要因があると考えられる。農家先生の側においては、若い学生の前向きな姿に感動している。「学生が鍬を担いで田を耕している姿や本当に米づくりを体験したいという前向きな姿に触発され、自分も熱心になって学生の皆さんと米づくりに関わることができました」「大勢の学生の皆さんと年齢差を感じながらも若いエネルギーを吸収し楽しみながら共に農作業することができました」。「健康である限り信大茂菅ふるさと農場で、夢多い学生の皆さんと力を合わせて共にがんばりたいと思います」。「農場が取り持つ縁で、学生の皆さんと交流することができ、一緒に活動できたことが一番の喜びです」と述べてくださっている。このような大きな心で学生を抱擁して下さっていることは、学生の心にも直ぐに伝わる。全国各地から信州大学教育学部に学んでいる学生たちにとってこの農家先生は、「長野のお父さん」であり「長野のお母さん」と呼

ばれるような存在になっている。それでは学生達は「長野のお父さん」からどのような学びをしているのであろうか。

6.1 学生が高齢者の姿勢から学んでいること

平成 15 年度に茂菅の農場長をつとめた学生は「高齢者の H 氏と話をする中で、H 氏から学生の皆さんと共に農業ができ、学生と話すことで元気になりますと話してくださいました。こちらが手伝ってもらってばかりなのに、そんなふうに思っていてくださったのだとわかり、とても嬉しく感動しました」と述べている。H 氏の謙虚な人間性に学生は人間としてのお手本に接して感動しているのである。

平成 14 年度に農場長をつとめた学生は実践記録に次のように述べている。「茂菅ふるさと農場で大変お世話になってきた H 氏がある。この方は農業一筋に生きてこられた農業のプロで、一年間を通して私たちの活動にアドバイスをしてくださり、作業面でも協力してくださった。この方が一年間の活動が一段落したと言うことで、学生スタッフ全員の前であいさつをして下さった時の話がとても印象的だった」と次のように述べている。「今年初めて田んぼにフナっこを放し稲刈りの時に成長したフナを子どもたちに持ち帰らせようという計画が学生の側から起こり、本当に無事にフナっこが生き延びてくれるのか、田干しのときはどうするのかと不安を覚えました。そこで子どもたちがフナを持ち帰られるようにするために、フナの一部を H 氏の池でそだてました。いよいよ稲刈りを迎えました。すると田んぼのなかでわずかに水の残ったところでフナっこがいきっていたんです。しかもうちの池で育ったフナっこよりかなり大きく成長していました。私はずっと農業をしてきましたが、生き物の生命力についてまた新しく学ぶことがあるのだと気づかされました」。

この学生は H 氏のいつまでも学び続ける姿勢に感動すると共に、自分たちのフナを育てたいという前向きな願いが、H 氏を勇気づけていたことを感じ取ったのであった。

6.2 学生による地域貢献の重要性

平成 13 年度の農場長をつとめた学生は、茂菅ふるさと農場を通じた学生による地域貢献の重要性について述べている。「茂菅ふるさと農場では JA ながのを通じて地主の方から農地をお借りしたし、田植えをはじめ多くの作業の度に茂菅地区の農家である H 氏のご指導をいただいた。田んぼに稲を植えた後では、水利組合の方に無理を言って水揚げのポンプ当番を教育実習期間からはずしてもらったりした。このように、いろいろな人と協力しながらやっていくことはとても大切である。私たちはあくまで学生であり、できることには限界がある。他の機関の手をかりていかなければできないこと、誰かに教えてもらわなければできないことはたくさんあり、そんな時は遠慮しないで協力をお願いすればよいと思う。ただ協力を依頼するだけではなくこちらはできる限りの地域貢献ができればそれでよいと思う。何か物で返すというのではなく、私たち学生ができることでよいのではないだろうか。とれた野菜をお分けするとか、何か体力的なことで作業を手伝うとかそれで十分だと思う。そういうつながりを持って行く中で茂菅ふるさと農場に関係している多くの学生は、地域の農家の H 氏ととても仲良くさせていただいている。このような関係はこれからもた

くさん持てるようにしたいし、たいせつにすべきだと思う」。

地域社会での学生と地域の人々との交流においては、一緒に働いたり、語り合うことを通して相互理解を深めることが重要であると指摘した学生がある。「連携には一緒に流したり、話をするることによる相互理解が重要であると思いました。連携とはどちらか一方が他方に尽くすのではなく、お互いに尽くし合うことだと感じました。H氏との付き合いの中で長野県での『お茶』の時間の重要性を学びました。お茶を飲みながらたわいおない話をするなかで様々なことを学びました。地域連携にはこのような語り合う時間が重要であると思います」。

6.3 学生と高齢者の協働によるカリキュラム開発

これまで学生と高齢者が協働してカリキュラム開発をしていく上で、両者がどのような学びをしたかについて、「信大茂菅ふるさと農場」での事例を基にして考察してきた。学生と高齢者が協働してカリキュラムを開発していくなかで、高齢者は学生の前向きな取り組みや姿を見て感動しており、そのような学生の姿が高齢者の農場への更なる協力や支援のエネルギー源となっている。また、学生は農業の知識だけでなく高齢者の行動や言葉に勇気づけられている。高齢者の行動や言葉に勇気づけられた学生はさらに活動への意欲を高める。

そして、「学生と一緒にいると元気になる」という高齢者の一言が、学生に自分たちが高齢者にとって大事な存在であることに気づかせる。このように学生と高齢者が協働してカリキュラム開発に取り組み、一緒に行動していくところに両者の相互の学びが成立していくことがわかる。このことが世代間交流における学びを永続させていく重要な要因であるといえよう。

「信大茂菅ふるさと農場」が2007年度で8年目を迎えることができたのも、一重に学生の活力と地域の高齢者であるH氏、JAながの営農指導部のご支援の賜である。

高齢社会を迎えた我が国の学校教育においても、共に喜び合える世代間交流を継続的に進めて行くことが求められている。この課題に取り組む教師に求められる力量について次に考察したい。

7. 学校教育における世代間交流に求められる教師の力量

学習指導要領の変遷の分析から学校教育においては祖父母、高齢者、地域の人々に関する学習が年々重要となっており、とりわけ平成10年度版からは開かれた学校づくりを進めるためにも祖父母や高齢者、地域の人々との直接的な「連携・協力・交流」を重視した世代間交流が学校教育に求められていることが明らかとなった。

一方、高齢者からのインタビュー調査ではボランティアに参加している高齢者から「子ども達と交流したい」、「自分の技を教えたい、子ども達から学びたい」、「子ども達の役に立ち、子ども達の喜ぶ姿を見たい」という返答があったように高齢者も子ども達との実際の交流を望んでいることが明らかになった。

また、「信大茂菅ふるさと農場」の事例からは、学生と高齢者との連携・協力関係が継続されていくためには両者の協働によるカリキュラム開発が重要であることについて述べた。須坂の事例も茂菅の事例もともに地域社会における世代間交流の実践であった。

学校を開かれた存在とするため重要な世代間交流と、高齢者の側の生き甲斐に関わる世代間交流の願いの両者を検討すると、共通点として両者ともに世代間交流を必要としていることが分かる。しかし、両者が世代間交流を求めているとしても交流が行われるとは限らない。学校側と高齢者の願いを車輪に例えたならば、両車輪が共に進んでいかなければ交流は始まらないであろう。学校側と高齢者の願いの両車輪が共に進んでいくためには、二つの車輪を結ぶ車軸が必要となってくる。学校側と高齢者の願いの両車輪を結ぶ車軸にあたるものこそ教師の力量ではないのかと筆者は考える。児童・生徒の願いを把握する力、高齢者の願いを把握する力、交流をコーディネートする力などさまざまな教師の力が発揮されてこそ児童・生徒と高齢者の交流が進展するのではなかろうか。

今後は、児童・生徒の実態と共に交流をする相手の実態や思いを十分考慮し、児童・生徒と高齢者の互いにとって実りのあるカリキュラムを開発し、世代間交流の実践を行なっていきたいと考える。

(注)

- (1) 文部省『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について：中央教育審議会第二次答申、文部時報7月臨時増刊号第1449号』ぎょうせい、1997年。
- (2) 角尾篤子「日本および米国における高齢者、若者、子供による世代間交流の研究」「世代間交流」プロジェクト編集委員会編『世代間交流』第2号、信州大学教育学部附属教育実践センター、2002年、1～11頁。
- (3) 文部省『小学校学習指導要領 昭和33年(1958)改訂版』明治図書出版、43頁。
- (4) 文部省『小学校学習指導要領 昭和43年(1968)改訂版』明治図書出版、35頁。
- (5) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成10年12月)改訂版』大蔵省印刷局、24頁。
- (6) 同上書、91頁。
- (7) 同上書、92頁。
- (8) 文部省『中学校学習指導要領 昭和33年(1958)改訂版』明治図書出版、209頁。
- (9) 文部省『中学校学習指導要領(平成元年3月)改訂版』大蔵省印刷局、118頁。
- (10) 同上書、119頁。
- (11) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成10年12月)改訂版』大蔵省印刷局、6頁。文部科学省『中学校学習指導要領(平成10年12月)改訂版』大蔵省印刷局、6頁。

文献

角尾篤子、2002、「日本および米国における高齢者、若者、子供による世代間交流の研究」、
「世代間交流」プロジェクト編集委員会編『世代間交流』第2号、pp. i - x i.

渡瀬典子, 2000, 「高齢者関連の体験的学習における学校・地域との連携状況「総合的な学習の時間」への展望」, 『お茶の水女子大学人文科学紀要』第53号, pp.489-497.

土井進編, 2003, 『第2期「信大 YOU 遊広場(プラザ)」の実践—臨床の知を求めて—』
信州大学教育学部 (平成15)

土井進編, 2004, 『信州大学における「地域貢献」の教員養成—第1期「信大 YOU 遊世間(ワールド)」の実践—』 信州大学教育学部 (平成16)

(2007年6月30日 受付)